

2023（令和5）年度

1日[*]

国語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十一ページ、、の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがある場合は、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず**黒色鉛筆**を使用し、**解答用紙に記入すること。**
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで完全に消すこと。
- 8 解答に関係のない符号（?レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

過去という概念は日常時間のものであることは確かだとしても、その過去という言葉の意味をどこに探ったらいのだろうか。それは過去という概念が全裸で露出して現れる場面であろう。そしてその場面とはいうまでもなく想起の体験であろう。想起の体験においてこそ人は過去に最も直接にかかわるからである。過去を想起する、というよりはむしろ、想起される経験が過去経験なのである、という意味で想起は「過去」の定義的体験なのである。

想起体験を検討する最初のタンシヨは一つの根強い誤解を除去することにある。その誤解というのは、想起とは過去経験の再現または再生であるというものである。例えば今、去年の夏の旅行を思い出しているとしよう。このとき去年の旅行の経験が今甦よみがえっているのだ、今再びその経験を思い返して味わっているのだ、人はこう思いがちである。しかしこれこそ想起体験についての根本的な誤解であると私には思われる。それは成心なしにそのような想起体験を想起してみればすぐ気づくことである。昨年イの旅行で見た海の青さが今眼に見えていようか。汽笛の音が耳に響いていようか。運悪く起きた歯の痛みが今また才イクバに起きていようか。そんなことは全くだらう。もちろん、海の色や汽笛や歯の痛みイのことはよく憶えており、今それらをまざまざと想い出している。しかし、まざまざと想い出すということはそれらを再び知覚することではないのである。X。再現すること、再生することではない。たとえウスめられ弱められた形であるにせよ、想起は弱毒化された知覚ではないのである（ヒュームは誤ってそう考えていた）。想起とは知覚と全く別種の経験の様式なのである。日ほしにされ貯蔵されたスルメ様の知覚ではなく、喉元にこみあげてくる知覚のおくびでもない。想起とは知覚の想起であって知覚の再生ではない。海の青さを眼前に知覚することもできるが、それを灰色の都会の真中で想起することもできる。つまり、想起とは海の青さにかかわる今一つの経験の仕方として知覚と並ぶのである。一般的に言えば、一つの経験にかかわる様式には二つあって、その一つが知覚と行動の様式、今一つが想起なのである。あるいは、二つの経験の様式があるといってもよいであろう。いうまでもなく、知覚と行動の様式は前節注1で述べた「今最中」の経験として今現在の経験である。それに対して想起の

様式での経験は「過去」の経験なのである。そしてこの過去の経験として想起される経験は「かつて」の知覚・行動の現在、経験に他ならない。この意味では「かつての現在経験」が再び経験されるのが過去経験だといえる。ただそれがかつての知覚・行動経験の再度の繰り返しだとするのが右に述べた誤解なのである。

こうして過去経験の「過去性」、その経験が「過去のものであること」は、それが「想起経験である」ことの中にある。しかし「過去」の意味には「現在より以前である」という時間順序の比較が含まれているはずであり、したがって「現在以前」という比較が「想起」の中に含まれていなければならないはずであるが、果たしてそうであろうか。想起されるということこそその経験の過去性の意味である、とする今述べた見解にとっては、では「現在以前」ということが想起体験に内在しているか、というこの問いは試金石として決定的な問いである。

それに肯定的に答えることができるかと私には思われる。そのための参照として知覚体験、そして特に視覚体験についての一つの観察から始めたい。何が見えていようと見えている物は必ず「離れて見える」という事実注意到注意したい。何が距離ゼロの所に見える、ということは決してない。どんな場合にでも見えている物の手前には前景空間がある、つまり、現に何かの前景が事実見えているかあるいは何かの前景が見える余地がある、ということである。これを「離隔の事実」と呼んでおく。視覚体験におけるこの空間的な離隔の事実に対応して、想起体験には時間的な離隔の事実がある、これが私の指摘したいことなのである。想起された経験、例えば先刻の昼食と、それを想起している現在只今との間には必ず何ほどの時間的間隔があつて、それがゼロということはありもしないし想像することもできない。想起された経験の時間的手前には必ず何かの時間的前景となる経験があるか、ありうる、これが想起における離隔の事実である。この離隔がゼロだということは時間間隔がゼロだということであり、それは想起された経験とそれを想起している想起体験そのものが同時だということであり、例えば食事の知覚・運動を経験しつつしかもそれが想起である、という不可解なことになる（「既知体験 (déjà vu 体験)」という有名な体験がある）。つまり、離隔の事実を反した想起というものは考ええないのであり、それほど離隔の事実が想起経験に本来的にそなわっているのである。

この離隔の事実によって想起される経験は必然的にその想起体験自身よりは「以前」のものである。そして「想起される」経験であるという意味で「過去」である経験はまた必然的に想起経験自身よりも「以前」であるという意味での「過去」でもある。換言すれば「過去」とは「想起される」ことであるという見解はまた「現在より以前」という意味での比較「過去性」をそなえているのである。そしてこのことは「想起される」ことをもって「過去」とするこの見解の妥当性を強めるものだということができよう。さらに「想起過去説」とでも呼べるこの見解は、前節で述べた「知覚（行動現在）説」とでも呼べる見解と平行し、両者相まって、時間の様相（過去・現在・未来）は直接体験の中に求めるべきであって、物理的時間 t の上での相対的時間順序で安易に片づけてしまふべきではないという考えを指向するものである。 t の上に一点を定めて「現在」だとし、それより右（または左）をその現在に対して「より以前（またはより以後）」だとして、それが「過去」の意味であるとする常識は本末転倒である。なぜならば、「現在性」「過去性」という時間様相が最初であり、この様相が「より以前」「より以後」という相対的時間順序の関係の中に入るのであって、時間順序によって時間様相が定義されるのではないからである。

このように、想起過去説は想起過去はまた現在以前、という意味での過去でもある、という重要な関係を内含するが、さらに今一つの重要な事実をも内含している。すなわち、想起される過去にあつては想起の誤りということがありえないということ、いわば想起無謬論を内含しているのである。だが、過去はかくかくであったということの中に一切誤謬というものがありえない、というのはいかにも納得しにくいことであり常識に真つ向から衝突することである。それでこのことを説明するため一つの迂路をとろう。つまり、この一見途方もない想起無謬論が夢見の経験においては比較的たやすく納得されることを示し、それを足掛かりにして覚醒時想起の場合にも夢の場合と同様に成り立つことを見ようというのである。

例えば、私が昨夜の夢を想起し、その中で高いビルから鳥のように飛び降りたと想起する。このとき、いやそれは間違いだ、飛び降りなどではなくただ墜落したというのが本当だと言ってみよう。しかし以上で述べた想起過去説を前提とする限りは、「墜落した」ということは「墜落したと想起する」ということに他ならない。ところが私は飛び降りたと想起しているのだから墜落したと想起することはありえない。したがって「墜落した」ということもありえない。それゆえ誤っているのはこの夢

想起批判の方であつて夢想起の方ではない。だから夢はまさに想起される通りの夢でしかありえず、その想起が誤るといふことはありえない。この夢の場合の想起無謬論は一見無理な屁理屈のように見えるだろうが、常識を離れて夢見のことを考えれば見かけよりはずっと素直な観察であることが解ると思う。夢はみたがそのことを憶えていない（想起できない）、ということとは日常日本語では意味をなさない（恐らく他の言語でも同様であろう）。同様に、夢をみたのを思い出すが実は夢をみなかった、というのは、青い空が見えているが実は見えていないのだ、というのと同じで意味不明の言葉である。

^E 夢を思い出すとは、一度みた夢を今一度ハイスピードで見直すことではない。それは一般に想起とは知覚の再生や再現でないのと同様に夢のビデオではないのである。むしろ事は逆で、夢を思い出すというそのことの中に「夢をみた」という過去形の夢見の意味がすべて含まれているのである。夢を思い出す、ということ、その想起体験こそ実は過去形の「夢をみた」という経験に他ならない。「……が見える」という視覚体験が「……が見える」経験であるのと平行に、夢の想起体験が「夢をみた」という経験なのである。

（大森荘蔵『時間と自我』による）

注 1・3 前節で述べた——日常生活の「今現在」は「今最中」（「……のまっ最中」）経験の持続であるのに対し、物理時間 t における「今現在」は、点時刻上の瞬間的時間であることが前節で説明されている。

2 既知体験 (*déjà vu* 体験) ——一度も経験したことがないのに、経験したことがあるように感じること。
déjà vu (デジャヴュ) はフランス語。

4 無謬——誤りがないこと。

問一 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) タンシヨ

- 1 レイタンな対応を受ける
- 2 タンペン小説を読む
- 3 タンドク行動を慎む
- 4 センタン技術を駆使する
- 5 タンリヨクのある人物

(イ) オクバ

- 1 芸のシンオウをきわめる
- 2 大陸をオウダンする
- 3 セイオウの文明
- 4 極楽オウジヨウをとげる
- 5 オウメン鏡で光を集める

(ウ) ウスめ

- 1 余罪をハクジヨウする
- 2 実力がハクチュウする
- 3 資格をハクダツされる
- 4 ハクシキをひけらかす
- 5 ハクシヤを進呈する

問二 傍線部(あ) (う) の語句の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) 成心なしに

- 1 子供っぽい気持ちで
- 2 不誠実に
- 3 先入観なく
- 4 事細かに
- 5 自分のこととして

(い) 試金石

- 1 相手を混乱させる策
- 2 考える限り最高の案
- 3 判定の基準となる物事
- 4 永久に答えの出ない問題
- 5 あらかじめ用意されたもの

(う) 途方もない

- 1 絶望的であること
- 2 当たり前であること
- 3 取るに足りないこと
- 4 非常に難解なこと
- 5 道理に合わないこと

問三 空欄

X

に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 想起は過去と現在に関わるもつとも直接的な概念である
- 2 想起は遙かな過去に淵源があり、そこから訪れる
- 3 想起とは知覚と行動の様式を統一する経験である
- 4 想起とは過去の知覚を繰り返すことではない
- 5 想起は過去の経験の再現であり、また再生の体験である

問四

傍線部 A 一つの根強い誤解とあるが、その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 過去に見たり聞いたりしたことを、場所や時間を変えても思い出せると安易に考えてしまうこと
- 2 過去の知覚こそが経験であり、過去を思い出すという行為は経験の再現であると考えること
- 3 海の青さや汽笛の音は、それを経験した過去の知覚だけが現実のものであると思ひ込むこと
- 4 経験にかかわる様式の一つが知覚と行動の様式であり、もう一つが想起であると認識すること
- 5 弱まっていく過去の知覚を思い出す行為を通じて、過去という概念が明らかになると考えること

問五 傍線部B「現在以前」という比較が「想起」の中に含まれていなければならないはずであるが、果たしてそうであろうか」とあるが、この問いに対して筆者はどう答えているか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 過去とは物理的時間の上に定められた一点である「現在」より「以前」であることを指すので、答えはイエスである
- 2 過去とは物理的時間の上に定められた一点である「現在」より「以前」であることを指すので、答えはノーである
- 3 想起経験には離隔の事実がそなわっており、また想起される経験は想起体験自身より「以前」なので、答えはイエスである
- 4 想起経験には離隔の事実がそなわっており、また想起される経験は想起体験自身より「以前」なので、答えはノーである
- 5 想起体験は経験の仕方として知覚と並ぶものであり、どちらがより「以前」と一概には言えないので、イエスともノーとも言えない

問六 傍線部 C 本末転倒であるとあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 物理的時間の中の定められたある一点より「以前」である、ということと「過去」が定義されるから
- 2 まず時間様相があり、その時間様相と相対的時間順序の関係によって「過去」が定義されるから
- 3 物理的時間の中の「現在」において想起される体験そのものが「過去性」を内含しているから
- 4 離隔の事実に反した想起が考えられないのと同様、相対的時間順序に反した時間様相はありえないから
- 5 想起体験そのものと想起体験において想起された経験とが同時であるということになってしまいうから

問七 傍線部 D 「一つの迂路をとろう」とあるが、ここで「迂路をとる」とはここではどのようなことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 想起とは個人の内面に深く関わる行為なので、外部からその誤りを指摘することには意味がないと直接的に示すこと
- 2 常識外れともいえる主張を展開する必要があるので、非常識な想起の端的な例として夢を取り上げるということ
- 3 夢という好例を用いて、想起無謬論の批判には日本語として意味をなさないものが多いことを明らかにすること
- 4 「夢をみた」という経験の意義を示すことで、夢で見た内容の誤りを指摘することが不当であると強調すること
- 5 想起には誤りがないという一見受け入れがたい主張を納得させるため、話題を理解が容易な夢の話に転じること

問八 傍線部E 夢を思い出すとは、一度みた夢を今一度ハイスピードで見直すことではないとあるが、「夢を思い出す」との説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「夢を思い出す」ことは、夢の中で起きたことへの批判は当然のこととして夢の内容を想起する経験である
- 2 「夢を思い出す」ことは、夢を見たこと自体を憶えていなくても想起することは可能だと主張することである
- 3 「夢を思い出す」ことは、夢の中で起きたことがどんなに非現実的であろうとそれを許容することである
- 4 「夢を思い出す」ことは、みた夢の内容を再生するのではなく、それ自身が「夢をみた」という経験である
- 5 「夢を思い出す」ことは、夢の中で起きたことと現実との時間的順序について関係を整理する経験である

問九 本文の内容に合致しないものを次の選択肢の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 何らかの経験を想起することにより、その想起された経験は「過去経験」として定義される
- 2 ある経験を知覚したときその「ある経験」は現在の経験だが、同じ経験を想起したときそれは過去の経験である
- 3 ある過去経験を明瞭に思い出せるならば、それは想起体験においても全く弱まっていない知覚といえる
- 4 経験しつつ同時にその経験を想起することが不可能な以上、経験と想起の間には離隔がある
- 5 夢の想起は、原型の夢と照合して正誤という判断のありうる過去形の経験である
- 6 想起される過去経験の中にある限りは、信じがたいことであろうと誤りというものはありえない

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

消費とは何か。これまで消費は、幾ばくかの金を支払い財を手に入れる、等価であることを基本とした「交換」を暗黙の前提として考えられることが多かった。貨幣を手放し、それに釣り合った何かしら有用なモノやサービス、情報を手に入れる。そうした「交換」を消費と同一視する見方が、日常生活でも理論的にも当然のものとして受け入れられてきたのである。

その代表が、カール・マルクスの議論である。マルクスは、商品購買を貨幣を用いて等価な対象を手に入れる「交換」として設定した。だからこそ「生産は直接に消費であり、消費は直接に生産である」ともみなされる。マルクスによれば、「生産」とは原料や工場等の施設・機械（＝不変資本）とともに、労働力商品（＝可変資本）を買い使うことを意味しており、だとすれば商品を等価に買い使う「消費」とのあいだに論理的なちがいはない。何かを産みだすようにみえる生産的消費と、そうではない消費は異なるとみられることもできる。しかしその区別は突き詰めれば結果論にすぎないともいえる。何かしら有用なもの（＝使用価値）を産むための「交換」とそれを手に入れ使うための「交換」という意味では、生産と消費はあくまで転倒しつつ共通しているのである。

^A こうしたマルクスの見方をベースとして、二〇世紀後半には、さらにその社会的意義を拡張した見方も付け加わる。たとえばジャン・ボードリヤールは、消費をモノが自然にもつとされる有用な機能（＝使用価値）だけではなく、社会的に割りあてられた記号的意味を目的とした実践として再定義した。微細なちがいに応じて、商品には最新の／伝統的な、きらびやかな／落ち着いたといった異なる記号的意味が割り振られる。そうした記号的意味を自由に使い生活を飾ることこそ、現代社会ではおもな消費の目的になっているというのである。

ボードリヤールはこうして「交換」の対象を、モノの有用な機能から社会的な意味にまで拡張することで、現代の「消費社会」をかなり整合的に説明することに成功した。現代社会では、たしかに使用価値を基準とすれば「余分」^Bにみえる消費が、いつそうにぎやかに続けられているようにみえる。それは産業機構が、多様なバリエーションをもつ家や車、衣装や化粧品な

どの商品を次々と送りだしているからであり、そうして割り当てられた異なる記号的意味を終わりなく消費しつつ、暮らしを意味づけていくことが、現代生活ではとくに大きな役割を担っているというのである。

とはいえこうした見方には、限界も残る。そもそもボードリヤールは、消費によって貨幣を手放しそれに見合った記号的意味を手に入れるというが、実はそれも等価な「交換」を前提としているという意味では、マルクス主義的な見方を大きく外れるものではない。有用なモノの機能の代わりに、記号的な社会的な意味が獲得されるとみなされるとい意味で、ボードリヤールの見方は「交換」の概念をより現代的なものにバージョンアップしたものに留まるのである。

その上で大きくみれば、こうして「交換」を基準として消費を捉える見方が、現代社会をしばしば変化の可能性が乏しく、それゆえへイソクした場のように立ち現せてしまうことが問題になる。わたしたちは良くも悪くも、等価な「交換」によって維持される社会の合理的な完成形としての「消費社会」を生きているとみなされるのであり、そうした前提のもとではこの「消費社会」がそれ自体として変わる可能性は真剣には考慮されない。とくに現在では、この「消費社会」のシステムがグローバルに拡大し、世界を I しているとみなされている。そのせいで「消費社会」の拘束力はより逃れがたいものであるかのように信じられてしまうのである。

結果として見失われてしまうのが、「消費社会」の固有の歴史である。消費を「交換」としてみるかぎり、「消費社会」はたしかにそれをより合理化かつ大規模に展開することで完成された「歴史の終わり」のように現れる。その代わりに、他でありえた歴史的可能性や、他でありうる未来の可能性は消されてしまうのであり、そのため現代の「消費社会」に不満があったとしても、ただ商品購買をくりかえし、さらなる「消費社会」の発展に仕えるしか道がないようにわたしたちはしばしば説得されてしまう。

けれどもこうした見方は、消費を「交換」として形式化することによって信憑される幻影にすぎないのではないか。消費を「交換」と信じるからこそ、「消費社会」の変化の可能性はとるに足らないものとして捨象されてしまうのだが、だからこそそうして捨てられた現実の断片を救いだし、現在の社会が抱えるより多様な可能性に目を向けることがむしろ大切になる。

そのためには、まず「消費社会」を厳しく縛っているようにみえる「交換」としての消費の一貫性や合理性、さらにはその非歴史性を疑ってかからなければならぬ。実際、そうした試みが、これまでおこなわれてこなかったわけではない。たとえばG・バタイユは、「交換」からはみだす「消尽 (consumation)」という消費の機能を強調した。バタイユによれば、人はしばしば無駄遣いに見えるかたちで無用なモノを買い、または有用なモノをあえて無意味に使うという。それは未開社会以来の祭りや儀礼の場合によく観察されるが、しかしそれだけではない。たとえば現代ではメディア・イベントといったかたちで膨大な浪費がくりかえされるとともに、金融市場ではギャンブルと見紛うばかりの膨大なトウキが^(イ)続けられ、それがしばしば経済の運行の核心的な部分を握っているのである。

こうして「消尽」は、得られるモノがないという意味で、「交換」の合理性と鋭く対立するが、ただしそれは、「交換」とまったく無関係に実行されるわけではない。たとえばバタイユは、金を節約し、等価性ばかりにこだわる小心な人びとを嘲笑^(オ)い、自己の優位を確認するために「消尽」は実行されるという。いわば既存の社会を縛る秩序や道徳に対する「挑戦」として「消尽」はおこなわれるのだが、その意味では「消尽」は「交換」と表面的には対立するようにみえて、本質的にはそうとはいえない。「消尽」は、より皮肉にみれば、「交換」をエンカツ^(ウ)に動かすための

II

として働いているのであり、実際、現代のギャンブルがそうである。日常に労働の領域において不利な「交換」を強いられている人びとが、幻想的にであれそれに挑戦するために、パチンコや競馬にハマるといふ姿がしばしば目撃されているのである。

「交換」を相互的に補完するという限界をもつこうした「消尽」とは別に、しかし消費がさらに固有の機能を^E含んでいることに、むしろ注目していききたい。消費は有用な物資やサービス、情報、または記号的意味を手に入れる機会として働くが、ただし重要なことは、それらを獲得するだけならば、暴力や盗みといった手段でも不可能ではないことである。しかしそうした反社会的な手段とは異なり、消費はたんに対象を手に入れるだけではなく、その対象を自由^(イ)に選択し、さらにそうして選択された対象を好きに弄ぶことを合法的に許すという特徴をもっている。金を支払うかぎりでは対象を^(イ)恣意的に選び取り、自分の欲望を言い訳なく追及することができる。そうした自分勝手に、場合によっては残酷な実践が、貨幣を媒介として合法

的に認められていることこそ、消費の大きな特徴といえるのではないか。

実際、^注朝顔の流行がそうだった。満足な家をもつことができないう人びとも、朝顔を買うことで、誰にも言い訳することなく、みずからの趣味を追求し、その小さな対象を自由に選び、繁殖させ、廃棄することができた。朝顔を弄ぶこうした身勝手に、またある場合には残酷な快楽が、家を支配するいわば社会的な快楽の代わりになったのである。

そしてそれは朝顔の場合にかぎられない。こうした私的な選択と支配の可能性は、より一般的にも、消費の本質的な魅力として人びとをしばしば掴^{つか}んでいる。たとえばときにわたしたちは「交換」の合理性を超えて、他人からみれば、狂気とみまわがうばかりに消費にのめり込む。支払った金に釣り合う有益なモノを得ることだけでは満足せず、それを越え、モノや他者を限界なく弄ぶことにしばしば没頭するのであり、それを等価なモノを手に入れる「交換」の論理からだけではうまく説明することはできない。とはいえ「消尽」のように **Ⅲ** ことが、つねに第一の目的になっているわけではない。モノや記号の意味を獲得する「交換」、またさらにはそれらに対する挑戦としての「消尽」にむしろ先行し、慎重に戦略を練り、対象を選択し、支配していくことから最大限の快楽を引き出す実践が、しばしば消費の魅力としてより普遍的にわたしたちを誘惑しているのである。

(貞包英之『消費は誘惑する 遊廓・白米・変化朝顔』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある)

注 朝顔の流行——文化年間(一八〇四～一八一八年)、朝顔を買い栽培する流行が江戸や大坂などの大都市で起きた。

商品経済の発達が、都市の隅々にまで行き渡ったことと深く関係している。

問一 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) ヘイソク

- 1 質量保存のホウソク
- 2 心筋コウソクを防ぐ
- 3 距離のモクソクを誤る
- 4 ソクブツ的な考え方
- 5 出来ばえにマンゾクする

(イ) トウキ

- 1 カイトウ乱麻の働き
- 2 トウユを燃料とする
- 3 新機能をトウサイする
- 4 旅館にトウシユクする
- 5 株価がコウトウする

(ウ) エンカツ

- 1 平和をカツボウする
- 2 今年をソウカツする
- 3 カンカツ官庁に届け出る
- 4 ゲレンデをカツソウする
- 5 カツシヨクに日焼けする

問二 傍線部(あ)・(い)の語句の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) 整合的

- 1 現実をふまえているさま
- 2 論理が一貫しているさま
- 3 対象を大づかみにするさま
- 4 具体的で分かりやすいさま
- 5 細部まで行き届いているさま

(い) 恣意的

- 1 衝動にかられるままに行うさま
- 2 自分の意志をどこまでも貫くさま
- 3 他の迷惑をかえりみないさま
- 4 注意が行き届いているさま
- 5 自分の思うままにふるまうさま

問三

空欄

I

Ⅰ

Ⅲ

に入る言葉として最も適当なものを次の各群の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、

その番号を答えなさい。

I

- 1 相対化
- 2 均質化
- 3 絶対化
- 4 多様化
- 5 一般化

II

- 1 リトマス紙
- 2 アキレス腱けん
- 3 ガス抜き
- 4 罰ゲーム
- 5 タイムキーパー

III

- 1 「交換」の合理性を否定する
- 2 記号的意味を「消費」する
- 3 モノや他者を限界なく弄ぶ
- 4 「消費社会」を変革する
- 5 使用価値を産み出す

問四 傍線部 A こうしたマルクスの見方とはどのような見方か。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 有用なものを産み出す生産とそれを生活に役立てる消費とは、互いに依存し合う関係にあると考えること
- 2 何かしらの有用なモノやサービスや情報の売買は、等価な交換によって必ず行わなければならないと考えること
- 3 生産と消費は正反対の行為であるように見えて、何かを買って使うという点では同じであると考えること
- 4 何かしらの有用な商品の生産とその消費とを行う主体は、転倒しているようで本質的には同じだと考えること
- 5 生産は消費よりも価値があるように見えるが、生産を生産的消費と見れば両者の価値は同じだと考えること

問五 傍線部B 使用価値を基準とすれば「余分」にみえる消費とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 取っ手の欠けたマグカップを筆立てや物入れに再利用するように、モノをそれ本来の使用価値とは異なる目的のために使用すること
- 2 不要になった本やCDなどをネット・オークションで売るように、すでに消費し終わったモノを別のモノを手に入れるために役立てること
- 3 料理人が切れ味の良い包丁や扱いやすい鍋などの調理器具を大事に使い続けるように、特定のモノに過度に執着して使用すること
- 4 スーパーやデパートで販売戦略に乗せられて商品を買ってしまうように、余分なモノまで購入して結局使用しないままに終わってしまうこと
- 5 ブランドもののバッグをこれ見よがしに持ち歩くように、モノを使うだけでなくそのモノに認められる付随的な価値を楽しむこと

問六 傍線部C こうした見方とはどのような見方か。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「消費社会」で消費されるものはモノから記号的意味にまで及ぶという見方
- 2 等価な「交換」によって成り立つ「消費社会」を普遍的なものと考える見方
- 3 消費を「交換」ととらえる「消費社会」はいずれ行き詰まるととらえる見方
- 4 「消費社会」は「消尽」よりも等価な「交換」によって成り立つとする見方
- 5 「消費社会」には消費を「交換」としてみる固有の歴史があると考ええる見方

問七 傍線部D 労働の領域において不利な「交換」を強いられているとはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自分の労働を正当に評価してもらえないために、集団内での地位が上がらないこと
- 2 生活のために一生懸命こなしている労働が、社会の偏見によって見下されてしまうこと
- 3 労働をして稼いだお金を生活費や教育費などに回さず、遊興のために使ってしまうこと
- 4 労働に見合ったお金を得られないために、自分が望むモノやサービスを得られないこと
- 5 労働市場の悪化によって、自分の能力や適性に合わない仕事に就かざるをえないこと

問八 傍線部E 固有の機能とは何か。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 購入したモノやサービスや情報から、その対価に見合う快楽を最大限に引き出せること
- 2 家の代わりに朝顔を買うように、モノを獲得したいという欲望を最大限に満たせること
- 3 支払ったお金と等価なモノを得ることだけにとどまらず、それ以上のモノが得られること
- 4 限界をもつ「消尽」に代わって、既存の社会を縛る秩序や道徳に対して挑戦できること
- 5 貨幣を媒介として対象を手に入れ自由に扱うことに対し、誰にも文句を言われないこと

問九 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 マルクスは、等価を基本とした「消費」と「交換」の関係についての従来の考えに独自の議論を付け加え発展させた
- 2 等価な「交換」という前提を覆し、記号的意味という概念を付加し「消費」を再定義したのがボードリヤールである
- 3 「消費」は、「交換」とも、また「交換」と相補的な関係にある「消尽」ともそれぞれ異なる独自の実践であるといえる
- 4 「消費社会」の変化の可能性を探るには、「消費」イコール「交換」であるという考えを批判的に見る必要がある
- 5 人間は、進化のさなか、反社会的な手段でモノやサービスを手に入れることを捨て、「消費」という行為を生み出した
- 6 満足な家が得られない人びとの社会的な快楽として流行した江戸時代の朝顔栽培は、「消尽」に属する行為である

国語解答用紙 1日【*】

一

問一
(ア)
①
②
③
●
⑤
(イ)
●
②
③
④
⑤
(ウ)
①
②
③
④
●

問二
(あ)
①
②
●
④
⑤
(い)
①
②
●
④
⑤
(う)
①
②
③
④
●

問三
①
②
③
●
⑤
問四
①
●
③
④
⑤

問五
①
②
●
④
⑤
問六
①
●
③
④
⑤

問七
①
②
③
④
●
問八
①
②
③
④
●
⑤
問九
①
●
●
④
⑤
⑥

二

問一
(ア)
①
●
③
④
⑤
(イ)
①
②
③
●
⑤
(ウ)
①
②
③
●
⑤

問二
(あ)
①
●
③
④
⑤
(い)
①
②
③
④
●

問三
I
①
●
③
④
⑤
II
①
②
●
④
⑤
III
●
②
③
④
⑤

問四
①
②
●
④
⑤
問五
①
②
③
④
●
問六
①
●
③
④
⑤

問七
①
②
③
●
⑤
問八
①
②
③
④
●
問九
①
②
●
●
⑤
⑥

50点

50点